

魔術化する科学技術

若林幹夫

科学とは何だろう？ それは、単に確実な知識のことではない。仮説と検証によって確かめられた法則性によって世界を理解することが、科学という知の特徴である。古典力学も、相対性理論も、進化論も、遺伝子理論も、物の運動や生物の多様性、形質の遺伝などの観察可能な事実や出来事を説明するために、論理整合的に——ようするに「筋道立てて」——作られた仮説、つまり「仮の説明」である。こうした仮説は、それらと合致する事実があり、そしてそれらを否定する事実が見出されなにかぎりで、「さしあたり真なる理論」として認められる。**科学的な「理論」はこうした実証性——それを支持する事実があること——と反証可能性——その真偽が実験や観察によって証明されること——をもたなくてはならないとされる。**こうした手続きによって科学、とりわけ自然科学は「確実な知識」としての明証性をもつものとされるのだ。

だがしかし、そうであるとすれば、ようするに科学とは「すべてを知ることができる知」なのではなく、「実証的な手続きによって知りうるものだけを知る」ような知なのだということになる。科学的な知は、実証的な手続きによって真であるととりあえず認められる仮説以外は、「(まだ) わからない」として判断を保留しなくてはならない。そしてまた、どんな理論も「仮説」である以上、つねに“とりあえず”で“今のところ”のものにすぎず、それに反する事実によっていつ否定されないともかぎらない。科学的な知は「究極の真理」などけっして指し示さない。それが提示するのは、いつ否定されてもかまわない「さしあたりの真理」なのだ。

地球上のさまざまな海域や陸地の科学的な調査や測量がおこなわれる以前の古代や中世に描かれた多くの世界図には、その地図を描いた人びとがいまだ行ったことのない「未知の大陸」や「楽園」がしばしば描かれ、魔神や怪物たちが書き込まれることもあった。未踏の地は空白にしておく近代の科学的な地図とは異なり、中世以前に作られた世界図を貫く原則は、「知らない場所は、信仰や宇宙観にもとづく信念によって描く。」というものだ。未知の大陸を人は経験的事実としては知らないけれど、信仰や宇宙観にもとづく信念としては“知っている”というわけだ。世界に対する神話的、宗教的、呪術的思考は、実証的に知りえないものについても、信仰や宇宙観によって“知り”“理解する”。そこでは、科学的な知においては「知りえないもの」として沈黙しなくてはならない領域が、信念と想像力によって「知ること」ができ、描かれうるのである。

だから、科学に対する私たちの常識的な理解にはいささか反するかもしれないが、科学的な知は、宗教や神話や魔術や呪術よりも「無知」なのだ。逆に言うと、科学的な知の立場からすれば「わからなさ」を受け入れねばならないときにも、宗教や神話や魔術や呪術は非科学的な仕方です「わかってしまう」のである。

道具や機械、技術は科学的な知識と結びつくことで、その予測可能性と操作可能性を高めてきた。

そもそも科学と結びつく以前から、道具も機械も技術も、一定程度の確実な結果や効果を得るためのものであるという意味では、世界を予測可能で操作可能なものにするものだった。一定の使い方をすれば誰でもが利用でき、一定の成果が上がるのが、道具や機械や技術の本質なのだ。ある目的に

対して、リスクやコストを少なくし、効率をより上げるという意味で、道具や機械や技術は「合理的」である。そして過去2世紀以上にわたって、道具や機械や技術は科学と結びつくことで、この合理性を高めてきたのである。

ところで、原始や古代の人類にとって、世界は意のままにならない不透明さと、魔物や精霊が跳梁跋扈する不気味さに満ちていた。そうであるがゆえにそこでは、その不透明さと不気味さを消し去る術、すなわち技術としての呪術や魔術、宗教が必要とされたのだ。だから呪術も魔術も宗教も、近代科学技術の側から見てそれらがいかに不透明で不気味なものに見えようとも、それらに固有の透明さと理解可能性をもたらすものだったのだ。技術やそれを基礎づける科学的知識を蓄積し、道具や機械とそれらを使いこなす合理的思考をもつ現代人にとっての世界は、呪術や魔術、宗教がもたらす透明さと理解可能性を“誤った透明さ”、つまり誤謬として退け、理論的な仮説と実証にもとづく別種の透明な理解可能性と操作可能性で置き換えていったのである。

だがしかし、ハイデガーの言う意味での「不気味さ」は、こうした「合理性」をもつ科学技術が、その合理性の追求を通じてさらに新たな予測不可能性を生み出してしまうことを指している。科学にもとづく技術の中にも、それを生み出した科学にはあらかじめ予想ができなかったり、今のところ理解することができなかったりする不透明な領域があり、**科学技術の発展と高度化は、そのほの暗い領域を拡大させてゆく**。私たちの社会は科学技術によってこれまでのどんな社会よりも明晰で透明な理解可能性を手に入れたように見えるけれど、そのことによって同時に、これまでのどんな社会よりも巨大で強力な力とともにある不透明で理解不可能な領域を抱え込んだのだ。

そうだとすれば私たちは、原始や古代の人びとに比べて透明な理解可能性を手にしていないとは必ずしも言えなくなる。ナイフのような単純な道具を使う技術は原始や古代の人びとに劣るかも知れないが——石器の使用法についてならなおさらだ——、日々の暮らしの中で私たちは数多くの道具や機械や装置を使いこなす、その便利さを享受している。だがしかし、そうした道具や機械や装置がどのように作られ、どのように動いているかを、私たちの多くは理解していない。科学技術の発展と社会への応用、浸透は、「便利だが理解できない領域」を増大させる。通常の暮らしの中で、私たちはこの「わからなさ」の領域に目を向けることは普通ない。だが、いったんそこに目を向けるなら、現代の社会が個々の人びとにとっては見通すことのできない不透明さをもった科学と技術の上に立っていることがわかるだろう。世界を透明で合理的なまなざしの下に理解し、操作することを可能にしてきた科学と技術は、専門家ではない個々人にとっては不透明だけれども役に立つ、**まるで魔術のような領域を広げていったのである**。

こうした不透明さの中で、そもそも「仮説」、つまり「仮の説明」にすぎず、実証的な手続きによって確認できないことについては「わからなさ」を甘受しなくてはならない科学とその応用である技術が、来るべき将来にはいずれすべてを説明し、解決することができる「究極の真理」であるかのように受けとられたり、語られたりすることになる。科学によって何でも分かるようになると考え、技術によって何でも解決できると考えるとき、人は、科学が受け入れなくてはならない「わからなさ」に耐えることができなくなって、「何でも分かり、何でも解決できる。」という魔術や神話のような力を科学や技術の中に見出そうとするのだ。そう、現代の社会で科学は魔術化されうるのである。